

鍍銀染色の標準化を目指して

◎大石 彰太¹⁾、成清 羊佳¹⁾、古屋 佑真¹⁾、小林 隆樹¹⁾、介川 雅之¹⁾、国仲 伸男¹⁾
国立研究開発法人 国立がん研究センター東病院¹⁾

【はじめに】渡辺の鍍銀法(以下、鍍銀染色)は、結合組織中の細網線維を染め出す染色であり、組織構築の観察や炎症性疾患による線維化の観察・非上皮性腫瘍の診断には欠かせない。当検査室では鍍銀染色において調整済みのアンモニアック銀液(武藤化学)を使用していたが希釈倍率を定めていなかったため、時に目的とする細網線維の染色性が不明瞭になってしまっていた。よって今回我々は、染色性の安定を目的とし、プロトコル作成を行ったので報告する。

【対象・方法】対象は正常肝組織とし、使用する試薬は全て武藤化学の調整済試薬を用いた。方法は(1)アンモニアック銀液を①～⑤の条件で検討した。①原液、②原液をろ過して使用液とした、③蒸留水で2倍に希釈した、④蒸留水で3倍に希釈した、⑤蒸留水で4倍希釈した。染色プロトコルは、酸化3分、還元は最大3分、鉄明礬30秒、アンモニアック銀液は30～60分とした。水洗、アルコールで分別し水洗後、塩化金に10分、定着2分とした。コントロールは、銀液を調整して作製し、良好な染色性を有してい

た鍍銀染色標本とした。(2)アンモニアック銀液は方法(1)で得られた結果から①の条件でプロトコルを決定した。さらに、過去に染色した肝生検6症例と比較検討を行った。

【結果】方法(1)のコントロールと、銀液の条件①と②では染色性に差はみられなかった。また①においても銀粒子の付着はみられなかった。③～⑤ではコントロールと比較すると細網線維の染色性が減弱していた。そのためアンモニアック銀液は条件①の原液のまま使用することとした。染色性が安定していなかったのは銀液の染色時間が定まっていなかったことが考えられたため最低時間を30分とした。方法(2)では6症例に安定した染色性が得られた。

【まとめ】今回、アンモニアック銀液原液を用いた鍍銀染色プロトコルを作成することができた。標準化のためには調整済試薬を導入するだけでなく、症例間で染色性に差がなく安定した染色性が維持できるプロトコルであることを染色導入時に確認することが重要である。

連絡先：04-7133-1111